

令和6年度 中央区立月島第二幼稚園 自己評価報告書

学校名：中央区立月島第二幼稚園 所在地：中央区勝どき1丁目12番地2号
園長名：竹谷 直史
幼児数：95名 学級数：6 主任：1名 担任：6名 その他職員：8名

教育目標 心身ともに健康で主体的に生活する子どもを育てる。

- げんきなこども ○ やさしいこども
○ かんがえるこども ○ がんばるこども

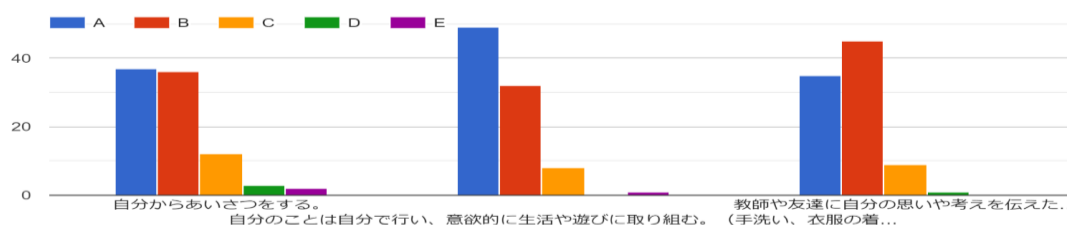
1 重点目標の達成状況及び取組状況

重点目標1 健康で明るい生活を送るための基礎力を育む

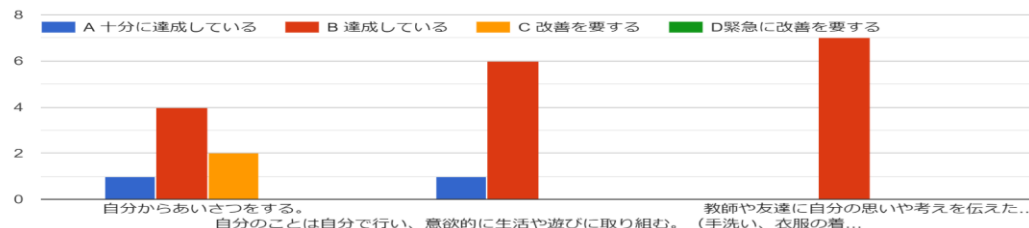
評価項目：発達段階に応じた基本的生活習慣や態度の確立を図る。

- 評価指標：・自分からあいさつをする。
・自分のことは自分で行き、意欲的に生活や遊びに取り組む。
(手洗い、衣服の着脱、片付け等、毎日繰り返し行い身に付ける)
・教師や友達に自分の思いや考えを伝えたり、相手の話を聞いたりする。

<保護者>



<教員>



○①では、保護者のA・Bのプラス評価が80%以上であったのに対し、教員では昨年度はなかったC（改善を要する）評価が28.6%あった。玄関における親子での朝のあいさつにおいて、幼児のみで走ってくる姿や、玄関先で我が子を見送ろうとする保護者が滞留することにより見通しが悪くなりあいさつがままならなくなるといった課題が挙げられた。安全面についても適宜啓発していくとともに、広さに限りがある玄関スペースに滞留しない流れも作りながら、親子ともに生活に必要な内容が身に付くようにしていく。

○②では、保護者のプラス評価が89.9%（前年度比2.5%増）と微増であったが、A評価が10.7%増、B評価が8.2%減と、改善傾向が見られている。今後も集団生活の中で友達の姿に刺激を受けながら、主体的に取り組もうとする姿を引き出せるようにしていく。また、家庭との連携も一層図りながら、幼稚園と家庭とでともに取り組み、幼児の姿を喜び合えるようにしていく。

○③については、②同様にプラス評価微増、A評価増、B評価減と全体的な改善傾向は見られたが、昨年度同様に、A評価よりもB評価の割合が多いことが特徴である。今後も家庭とも連携

しながら、子どもたちの話を丁寧に聞き、安心して自分の思いを表現できるように、また、話を聞いてもらう喜びを感じられるようにしていきながら、A評価の割合をより高めていきたい。

重点目標2 自ら環境に関わりながら、遊ぶことの楽しさを十分に味わえるようにする

(トライ！チャレンジ！月二っ子の育成)

成)

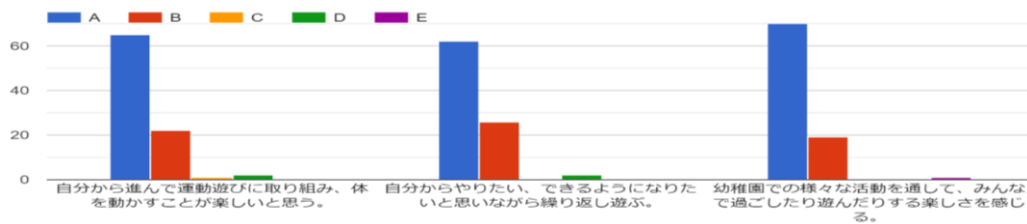
評価項目： 一人一人の力を引き出しながら、たくましい心と体をつくる。

評価指標： ・自分から進んで運動遊びに取り組み、体を動かすことが楽しいと思う。

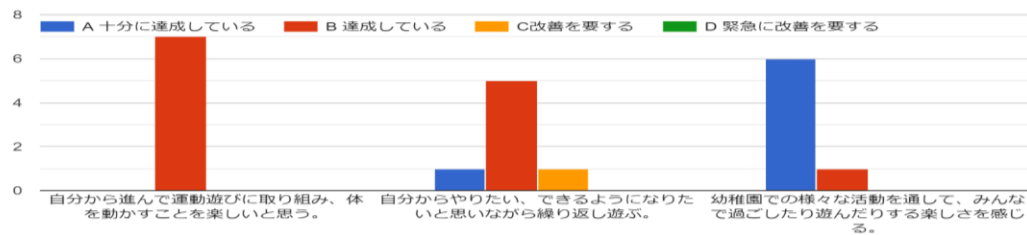
・自分からやりたい、できるようになりたいと思いながら繰り返し遊ぶ。

・幼稚園での様々な活動を通して、みんなで過ごしたり遊んだりする楽しさを感じる。

<保護者>



<教員>



○重点目標2では、全体として保護者が95%以上、教員が90%以上のプラス評価であった。

○①は、保護者の評価でA評価が昨年度の64.4%が72.2%に、C評価が昨年度の4.6%が1.1%になるなど、改善傾向が見られた。教員の方もB評価100%であった。今年度は教員の異動者が多かったことを踏まえて、緑のはらっぱなどの本園独自の環境を新たな視点で生かそうとする各種取組や、その様子を保護者専用アプリ「ルクミー」を用いて継続的に発信してきたことが一定の数値となって表れたもの捉えている。

○②は、保護者の評価で97.8%のプラス評価であったが、教員の方は、昨年度は見られなかったC評価が14.3%あったことが特徴である。繰り返し意欲的に取り組む幼児がいる一方、苦手意識をもちやすかったり、繰り返し取り組むことへの意欲が持ちにくかったりする幼児もいる。無理強いをすることのないようにしつつも、皆で取り組む時間をより生かしたり、「トライチャレンジ」の機会を活用したりしながら、全員が少しでも楽しく取り組めるような援助を工夫していきたい。

○③については、保護者のA評価が77.8%と、全体を通して一番高かった項目となった。教員の評価の方もA評価が85.7%と、概ね達成できた形となった。幼児にとって初めての集団生活となる幼稚園において、家庭ではできない経験を如何にして充実させていくかが

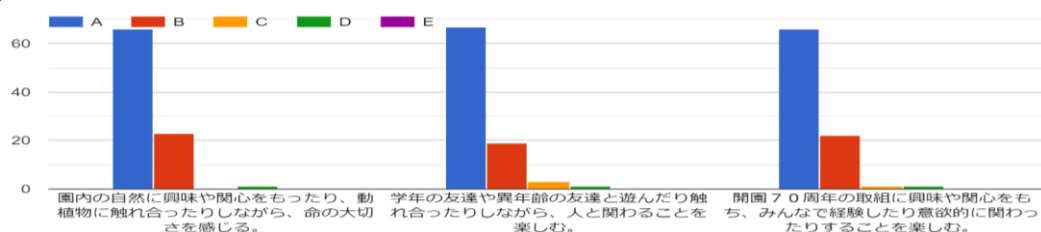
肝であると捉えている。日々の生活の中で様々な活動が展開できるようにしながら、みんなで過ごしたり遊んだりする楽しさを感じられるようにするとともに、その尊さを保護者とも共有できるよう努めていく。

重点目標3 幼児の生活や心情を豊かにし、思いやりのあるやさしい心を育む

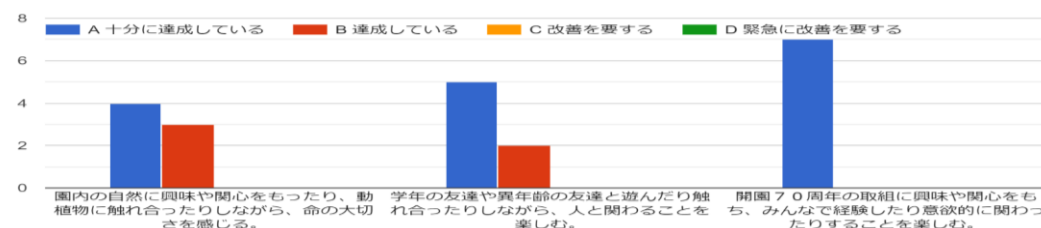
評価項目：園生活に興味や関心をもち、主体的に行動する幼児を育てる。

評価指標：・園内の自然に興味や関心をもちたり、動植物に触れ合ったりしながら、命の大切さを感じる。
・学年の友達や異年齢の友達と遊んだり触れ合ったりしながら、人と関わることを楽しむ。
・開園70周年の取組に興味や関心をもち、みんなで経験したり意欲的に関わったりすることを楽しむ。

<保護者>



<教員>



○重点目標3は、全体として95%以上、教員は100%のプラス評価であった。

○①では保護者のA評価が73.3%と、高い数値であった。自然環境が限られた地域であるだけに、ニーズが高い内容であることを鑑み、園内の自然環境を改善したり自然に触れたりする機会を相応に設けられるようにしてきた。自然物は可変性に富み、幅の広いジャンルでもあるため、幼児に対して発達に必要な経験ができるよう、今後も教材研究と指導の工夫に努めていく。二学期より降園場所を校庭とし、保護者が直接目にできる機会を設けるようにできたことも効果的であったと捉えている。また、昨年度より新たに迎え入れたウサギの飼育に関わる内容について、今年度からの職員にも継承されることは勿論のこと、PTAによる基金創設など、皆で愛情を注ぎながら関わっていこうとする姿が見られている。学校現場において哺乳類の飼育が少なくなっている現状の中、この内容を継続して行なうことができるのは、本園ならではの良さでもあるため、今後も大切に続けていきたい。

○②は、本園の研究テーマ「園生活を豊かにする環境の工夫 ～遊びの充実を目指して～」としても力を入れてきた内容であった。本園の施設環境は、1階と2階に分かれているため、異年齢での関わりがもちにくい。場の活用をすることで、異年齢交流がより豊かなものとなるようにしたいとの願いをもって取り組んできた。今後も本園独自のみどりのほらっぱ、わくわく広場（共有スペース）、遊戯室などの豊かな環境をより生かしていきながら環境や援助の工夫を

重ね、人との関わりが楽しめる幼児を育成していく。

○③は、今年度が開園 70 周年の節目の年であることに鑑み、新たに設定した指標であった。幼稚園の 10 年刻みの周年は幼稚園単体で取り組む形となっているため、その良さを生かし、幼児にとって真に必要な内容を模索しながら P T A とともに取り組んできた。今回の取組を通して、幼児のみならず大人も幼稚園の歴史を知り、多くの方々への感謝の念を持てたことは意義深いものがあつた。また、「音楽」をテーマにした各種取組の数々は、この年度で終わらせるものではなく、今後も大切に継承する必要があると捉えている。教員の A 評価が 100% だったこともその表れである。70 周年記念の歌やキャラクター、保護者・関係者有志による演奏会など、次年度以降の教育活動にも本園の特色として生かしていきたい。

2 重点目標以外の自己評価における達成状況及び達成のための取組状況

＜保護者による全体評価について＞

○全体平均として、プラス評価が 95% 以上（2 割は 100%）であった。その中で、C 評価が 5.5% ずつあつた項目が、「幼児は、幼稚園に行くことを楽しみにしている」と、「幼児は、年齢に応じて園生活に必要な生活習慣を身に付けてきている」であつた。これは、重点目標 1 で見られた傾向が表われた形にもなっている。初めての集団生活である幼稚園は、各種の生活習慣面を一つずつ身に付けていく段階であり、大人がイメージする望ましい姿にまでは、すぐに辿り着かないという実態がある。そのため、家庭と連携を図りながら段階を踏んで進めていくことが欠かせない。今後も幼児期ならではの発達を踏まえつつ、スモールステップで一人一人の幼児の成長を幼稚園と保護者とでともに喜び合える関係を作りながら進めていきたい。

○プラス評価のうち、B 評価が 40% 前後と他の項目に比べて高かつたのが、「家庭でも基本的生活習慣を身に付けさせるために努力している」と、「家庭でも集団生活に必要な意識や態度を身に付けさせるために努力している」、「家庭でも、健康管理や体力つくりのために努力している」の 3 つであつた。家庭での教育力を問う内容であるが、概ねできているとしつつも苦慮しながらの関わりも相応にあることが伺える。我が子の年齢や時期、発達に応じた関わりの一助にもなるよう、今後も幼稚園で必要な内容を適宜発信できるように努めていく。

○情報発信については、自由記述欄にもルクミーやホームページにより日々の幼児の活動内容を可視化することへの感謝の念や、家庭での会話のきっかけになるなどの声が寄せられた。保護者からすると、幼稚園での生活の姿はイメージし辛い側面があるため、教育内容の理解促進のためにも様々な媒体を積極的に使いながら、受け手の側に立ったきめ細かい内容の発信に力を入れていきたい。

○自由記述欄に、幼児間のトラブルや怪我を心配する旨の記述が見られた。大きな怪我や心の傷にならないようにすることは勿論であるが、トラブルや小さな怪我を経験することを通して、他者の気持ちを理解したり相手に自分の思いを伝えたりする力、怪我につながる状況を判断する力や身のこなしなど、望ましい力が身に付く。その大切さを発信するとともに、トラブルなどが生じた際は保護者と情報共有を丁寧に行ないながら、ともに同じ方向を向いた関わりができるようにし幼児の学びの経験となるようにしていく。

＜教員による全体評価について＞

○小学校との連携について、昨年度よりも子どもたち同士の関わりが増えたり、施設運用面での情報共有がスムーズであつたりと、改善傾向が見られた。特に隣接するひだまり学級との交流が増えたのはうれしい姿であつたため、今後は他の学年の児童との交流の機会についても、より自然な形でもてるようにしていきたい。

- 安全指導について、年間計画に基づいて実施することは行なってきたが、より実態に即したものに改善していく必要がある。幼児の健康・安全面に関わる大切な内容であるだけに、前例踏襲で行なうことのないよう、内容を細やかに検証しながら実効性を高めていく。
- 特別支援教育に関わる内容について、全体での情報共有のための時間捻出が課題として挙げられた。教職員はそれぞれの勤務形態が異なることも鑑み、現存の会議や打ち合わせの仕組みを活用しながら適宜必要な内容を共有できるようにしていく。
- 全体保護者会の参加状況について、対面とオンラインのハイブリッド形式により実施しているところであるが、対面での参加率が減少し、オンラインでも部分的参加者が増えるなど、全体として好ましくない傾向が見られている。オンライン参加者が多くなることによる運用面での負担も大きいため、対面を基本としながら、全保護者が参加できるよう周知徹底を図っていく。
- 開園 70 周年に関わる各種取組を通して、教職員と幼児は勿論のこと、保護者、地域、関係者とともに本園の歴史を振り返りながら幼稚園をいつまでも大切に思う気持ちを育む機会とすることができたのは、今年度ならではの貴重な経験であった。

3 今後の改善方策

- 次年度より、預かり保育が 18 : 00 まで延長されることに伴い、保護者との細やかな連携の在り方をより丁寧に見つけていく必要がある。対面でやりとりをする機会を上手に設けつつ、電話やルクミーなど、その他の各種媒体も積極的に活用しながら信頼関係を醸成するようにしていく。
- 今年度経験した周年行事に関わる内容は、一過性のものにすることなく、次年度以降にも大切に引き継いでいくものである。音楽的活動などの各種取組や人との関わりなど、本園の特色としても生かしていきたい。
- 保幼小の連携について、今年度は交流の機会も相応に設けることができたため、今後は子どもたちにとってより互恵性のある内容となるよう、ともに計画を立案するなど更なる工夫に努めていく。
- 次年度より、中央区として「とうきょう すくわくプログラム」に参加する。幼児期は、非認知能力を培う大切な時期であることを鑑み、本園の特徴を生かしながら幼児の興味や関心に応じた探究活動を推進し、教育内容の質を高めていく。また、その成果を広く発信し、保護者や地域、関係者と共有できるようにしていく。

評価委員 小川美佐子委員 角山良敬委員 川原崎武委員 松本昌之委員
報告書作成者 松本昌之委員

評価時期 令和7年2月

1 重点目標の評価

- 登園時の挨拶、親子で手をつないで歩くなど、生活習慣面や安全面に関する内容は今後も意識して取り組む必要がある。親の模範となる姿を子どもに示していくことが大切。
- 重点目標2についてはプラス評価が非常に高く、95パーセント以上であった。集団生活だからこそできる経験についての意義は保護者も感じているのではないかと感じたが、心温まる取組であった。教員の自己評価は、100パーセントが「十分に達成している」と回答しており、教員も手応えを感じることができ意義があったと捉えていること、何よりうれしく感じている。今回の周年のコンセプトであった音楽的な内容は、今後も幼稚園の特色として継続して行っていただきたい。

2 今後の改善に向けた意見

- 次年度以降の大きな取組として、中央区立幼稚園全園が「とうきょう すくわくプログラム」に参加するとのこと、興味深く捉えている。幼稚園は、小・中学校のようにテストで点数を計らず、非認知能力である「協同性」「やる気」など数字で表せない力を大切にしており、今回の取組は、各園の特徴を生かしながら探究活動を進め、幼児の能力を育んでいくということであるため、是非子どもたちに還元できる取組を推進していただきたい。また、公表はできないことだとは思いますが、幼稚園出身者と保育園出身者で成績にどのくらいの違いがあるのか調べることは、今後の幼稚園の教育の評価に役立つのではないのか。小学校以降の成績に影響する可能性は十分あるのではないかと感じている。評価の基準を設けにくいいため難しいことではあるが、小学校と幼稚園で情報の内部共有をして、双方の教員がその効果を感じられる流れが生まれるようになると良いのではないかと。

3 その他の意見

- 年齢毎の成長が著しい幼児期における教育の重要性を感じている。50年近く経過した現在でも、ひな祭りの時期には我が子が幼稚園時代に製作したひな人形を飾っている。幼稚園を訪問する機会を作り、子どもたちの取組に直に触れてみたいと考えている。